

説教余滴 2019年12月29日、追悼・中村哲先生、

この一年も実に素早く過ぎ去りました。各人各様の想いが、おありに違いありません。

愛する人との思いがけない別れは、格別のことでしょう。いない事に慣れることが出来ず、つい話しかけている自分を見出す。さびしいことです。楽しい思い出をしっかりと胸に秘めて行くことも大事です。

12月4日、衝撃的なニュースが伝えられました。中村哲医師が、銃撃された、との一報です。「まさか、皆から愛されている、大事にされているはずだ。間違いだろう」と想いました。続報は、確認する詳報となりました。「間違いではなかった」それにしても何故、誰が、と幾たびも問いかけました。答えなしのままです。

「人間の心の闇の深さ」を神が示されたのだろうか。それにしてもむごい事をなさるなあ。神は、箱舟を出たノアたちに言われます。「人が心に計ることは、幼ない時から悪いから」地を呪うことはしない、と。

中村さんは、九州大学 YMACA のメンバーとして活動。精神神経科の医師となります。やがて、日本キリスト教海外医療協力会(JOCS)の派遣医師としてアフガニスタンに赴任します。活動を支援するためペシャワール会が設立されました。37歳でした。

以来、アフガニスタンを愛して活動を続けられました。「飢えと渇きは薬では治せない」「僕は生きている人を見る医者で、山奥から死んだ子どもを背負ってこられても何も出来ない、と怒りにも似た気持ち」に動かされ土木工学を学び、灌漑設備を作りました。日本古来・江戸時代に用いられた方法で堰をつくりました。村の人たちが力をあわせれば、今後も堰を作り続け、保守・管理することが出来ます。

「テロとの戦いと拳を振り上げ、“経済力さえつけば”と札束が舞う世界は、砂漠以上に危険で“面妖なもの”に映ります。」ペシャワール会会報に残された言葉です。